

風雨の晩の小僧さん

小川未明

青空文庫

都会とかいのあるくつ店てんへ、奉公ほうこうにきている信吉しんきちは、まだ半年はんとしとたたないので、なにかにつけて田舎いなかのことが思い出おもされるのです。

「もう雪ゆきが降ふつたらうな。家いえにいれば、いま時分じぶん炉辺ろべにすわつて、弟おとうや妹いもうとたちとくりを焼やいて食たべるのだが。」

そう思おもうと、しきりに帰かえりたくなるのであります。けれど、出しゆつばつ

発はつのさいに、

「信吉しんきちや、体からだを大事だいじにして、よく辛棒しんぼうをするのだよ。」と、
目めに涙なみだを浮うかべていった母親ははおやの言葉ことばを思おもい出だし、また、同時どうじに、
「どうせ一度いどは世よの中なかへ出でなければならぬのだ。どこへいっても

家いえにいるようなわけにはいかぬ。奉公ほうこうが辛いつらなどといって、帰かえつてきてはならぬぞ。」と、父親ちちおやのいつたことを思い出すと、いかに恋こいしくても帰かえられはしないという気きがしました。そうかと思おもうと、白髪しらがの祖母そぼの顔かおが、眼前がんぜんに見みえて、「信しんや、いつでも帰かえつてこいよ。おまえには家うちがあるのだから、ひどくしかられたり、辛棒しんぼうがでできなかつたり、また病びよう気きにでもかかったなら、いつでもお暇ひまをもらつてくるがいい。そのときは、そのときで、田舎いなかに奉公ほうこう口ぐちのないではなし。」と、祖母そぼは、いつたのでした。

彼かれが、故郷こきようのことを思い出だすと、まずこのやさしい祖母そぼの姿すがたが浮うかんだのです。

「あんないいおばあさんに、僕はよく悪口をいって、まことにすまなかつた。」と、信吉は、後悔するのでした。

彼は、なにかいい口実が見つかったら、田舎へお暇をもらつて帰りたいと思ひました。奉公が辛いなどといったら、きつと厳しい父親のことだからしかるであろう。けれど、病氣であつたなら、母も、祖母も、かならず口をそろえて、「おおかわいそうに。」といつて、帰つた自分を慰めてくれるにちがいない。彼は、故郷を慕うのあまり、病氣になればとさえ考へていたのでした。

このごろの寒さに、彼は、かぜをひいたので。すると、そのことを田舎へ手紙で知らせてやりました。しかし、もとよりたい

したこともなかつたので、すぐなおつてしまいました。この店の主人は、やはり小僧から今の身代に仕上げた人だけあつて、奉公人に対しても同情が深かつたのでした。信吉が病氣にかかると、さつそく医者に見せてくれました。そして、やがて、床から起きられるようになると、彼に向かつて、「早くなおつてよかつた。これからもあることだが、すこしぐらいのことを田舎へいつてやつてはならない。どのみち、親たちに心配をかけるのは、よくないことだからな。こうして、家を出たからには、何事も自分のことは、自分の力でするといふ決心が肝要なのだ。そして、親に心配をかけるのが、なによりも不孝である」と知らなければならぬ。」と、主人は、諭す

ように、いったのでした。これを聞いたときに、信吉は、いままでの自分の意気地なしが、真に恥ずかしくなりました。

「ああ、こんなもののわかつた主人を持ちながら、それを幸福と思わずに、いつまでも田舎を恋しがったり、ちよつとした病氣でも知らしてやったりして、ほんとうに悪かつた。」と、後悔しました。彼は、自分のまちがつた行為に氣づく、すぐに心から反省する純な少年であつたのです。

彼は、そろそろ仕事ができるようになったので、田舎の両親へあて、はがきを出しました。

「寒くなりましたが、ご両親さまには、お変わりもありませんか。私のかぜは、もうすっかりなおつて、起きられるようにな

りましたからご安心ください。今後よく辛棒して働きます。大きくなつて出世いたします。」と、それには書いてありません。

前後して親しかつた友だちから、手紙がとどきました。

* * * * *

なつかしき信吉くん。

こちらは、毎日ちらちらと雪が降っている。二、三日前田圃にたくさんのはまねこが降りていた。おそらく海も荒れて、魚が捕れないからであろう。僕が石を投げると、一時に空へ舞い上がつて、それはきれいであつた。しかも、奇怪な風景という感じがした。空は、毎日灰色に曇っている。そして、寒い風が

吹ふいている。関東かんとうの空そらは、これから青空あおぞらつづきだと聞いたきが、日本海岸にほんかいがんと、太平洋岸たいへいようがんとでは、それほど相違そういがあるのだろ
うか。もつとも山やま一つ越こせば、雪ゆきが降ふらないのに、こちらは、雪ゆき
が四尺しやくも五尺しやくもあるのだから、まったく自然しぜんの現げん象しょうばかりは
奇妙きみょうなものだ。

君きみは、その青空あおぞらの下したで、朗ほがらかに働はたらいていることだろう。僕ぼく
たちは、夜よるとなく、昼ひるとなく、あのゴーウ、ゴーウとほえるよう
な、また遠方えんぼうで、ダイナマイトで石いしを砕くだくような海鳴りうみなを聞きき
ながら、家事かじのてつだいをしたり、やがてくる春はるの日ひの用意よういに怠た
りがない。

なつかしき信しん吉きちくん。

君は、あの谷川のほとりのほおのきを知っているだろう。二人がやまばとの巣を捕りにいつて、もう先にだれかに捕られてしまつて失望したことがあつたね。僕は、あのあたりの景色が好きだ。君が出発する前に、平常から親しくしていた、たつ子さんと三人で、あすこの石の上で、なつみかんや、ゆで卵を食べて、形ばかりの送別会をやつた、そのとき、ちようど、ほおのきの花が咲いていたのを覚えていないか。僕は、いつまでも、あのときのことを忘れずにいる。なぜなら、あの日は、独り君だけの送別会でなく、たつ子さんとの送別会にもなつてしまつたからだ。たつ子さんは、君が東京へ立つて後まもなく、上州の製糸工場へいつてしまつたのだ。

この冬は、僕にとっていつになくさびしい。かるたを取って遊ぶにしても、またスキーをして遊ぶにしても、僕は、親しい二人の姿が見えないので、なんとなく独りぼちのような気がする。しかし僕たちは、いつまでも子供ではおられないだろう。みんなは大きくなつて、この世の中のためにつくし、親に孝行をしなければならぬのだ。

どうか、いつまでも、学校時代に培われた健全な精神の持ち主であつてくれ、そして、たとえ遠くわかれていても、おたがいに手を握り合つてゆこうよ。こちらのさびしいのにひきかえて、東京は、いつもにぎやからしい。おひまがあつたら、いろいろとおもしろいことを知らしてもらいたい。

信吉は、手紙を懐にしまつて、
 両方の目を赤くしながら、

しばたいていました。

日が暮れて、雨が降り出しました。
 信吉は、仕事場へ出て、

平常のごとく働いていました。

「きよの天気予報は当たつた。あのいい天気が、急にこんなに変つたからな。」と、年上の職工は、仕事台の上へ前屈みになつて、朋輩と話をしました。

このとき、主人は、ふいに思い出したように、

「このあいだいらしたお嬢さんの、オーバーシューズは今晩までのお約束でなかつたかな。」と、仕事場を見まわして、いい

ました。

「そうです。私わたしが、いま造つくっています。もうじきにできあがりですが。」と、茶色ちやいろのセーターを着きた職工しよっこうが、電燈でんとうの下したで手を働はたらかせながら、答こたえました。

「お約束やくそくなのだ。できたらすぐにおとどけしてくれよ。」と、主人しゆじんは、いつていました。

* * * * *

「お母さんかあ、たいへんな雨あめね。私わたし、明日あしたオーバーシューズがなくこまて困こまるわ。」

「きよこの晩ばんまでというお約束やくそくだったでしょう。だけど、この雨風あめかぜでは、できていてもとどけられないでしょう。」

「学校がっこうで、オーバーシューズがないと、おくつを脱ぬいで、スリ

ツパをはかないとしかられるのよ。」

「お天気てんきになりしだい、私わたしが催促さいそくにいつてきますから、明日あした、

もう一日いちにちだけ我慢がまんをしてくださいね。」

母ははと娘むすめは、戸外こがいに叫さけぶ雨風あめかぜの音おとに耳みみを澄すまして、火鉢ひばちのそば

でお話はなしをしていました。それは夜よるの八時じごろでありました。

隣となりのペスが、垣根かきねの内うちからしきりにほえているのが聞きこえます。

この犬いぬは、知らぬ人ひとを見るとよくほえる犬いぬで、いつか郵便屋ゆうびんやさ

んが、手紙てがみの配達はいたつができないと怒おこっていたことがありました。

その後ご、しばらく鎖くさりでつないであつたが、またこのごろは、放はなし

ておくようであります。

「よくほえる犬だこと、なににほえているのでしようね。」と、かね子は、読んでいる雑誌から目を上げて、外のけはいを聞き取るようにしていました。

「あの犬がいると用心はいいけれど、外を通る、なんでもない人までが迷惑しますね。」と、お母さんは、娘が正月に着る赤い色合いの勝った衣物を縫いながら、おつしやいました。

「ごめんください。」

このとき、玄関のあたりで、小さい声がしました。その声は、雨風の音に、半分消されてしまったのです。

「だれかきたのでない？」

「どなた！」といって、お母さんは、立ち上がられました。かね

子は、全神経をお母さんの足音の消えていく方へ集めていました。

「まあ、この雨に、とどけていただいたのですか、すみませんでしたねえ。」

お母さんの、こういつていられる言葉を聞くと、

「オーバーシューズが、できてきたのだから。」と、かね子は、すぐに走って、お母さんのところへいきました。

「かね子、この雨風の中を持ってきてくださったのだよ。」

お母さんは、くつ屋の小僧さんに対して、心からねぎらっていられました。かね子は、いまままで不平がましいことをいったのが、なんだか気恥ずかしく感じられて、顔を赤らめました。しかし、

さすがに喜びを禁じられなかったのです。そして、そこには、やつと十二、三の少年が、ぬれねずみになって立っているのを見ると、目頭が熱くなりました。軒燈の火が、マントを照らして、流れ落ちるしずくが光っています。

「お足に合いますでしょうか？」と、ふろしきを解いて、オーバーシューズを出して、少年はいいました。

「そうですね、だいじょうぶでしょう。かね子、ちよつとくつに合うか、当ててごらんなさい。」と、お母さんは、おつしやいました。

かね子は、玄関わきの戸だなを開けて、くつを取り出しました。そして、オーバーシューズをはめてみますと、すこし小さい

ようです。

「どれ、私にお見せなさい。」と、お母さんは、かね子の手からオーバーシューズを受け取って、みずからくつにはかせようとしたが、やはり小さくて入らないのでした。これを見ていた、小僧さんは、

「すこし小さいようですね。持って帰りました直してまいりましょう。そして、明朝早くおとどけいたします。」といいました。

「朝は、学校が早いのですから、七時までに持ってきてもらわないとまにあわないのですよ。」

「承知いたしました。」

小僧こぞうさんは、オーバーシューズを包つつんできたふろしきへふたたび包つつみかけていました。

「この雨風あめかぜの中なかをせつかく持もつてきてもらつてお氣きの毒どくですね。」

「どういたしましたして、こちらが悪わるいのです。寸法すんぽうをまちがえましてすみません。」

小僧こぞうさんは、丁寧ていねいにお辞儀じぎをして帰かえつてゆきました。

それを見送みおくつていた、かね子こさんは、小僧こぞうさんの姿すがたが闇やみの中なかに見えなくなる時分じぶん、

「かわいそうね。」と、しみじみとした調子ちようしで、お母かあさんに向むかつて、いいました。

「みんな、ああして修行しゆぎようをして、大きおおくなって、いい商しよう人にんになるのですよ。」と、お母かあさんは、いつて、しばらく考かんがえていらつしやいました。

* * * * *

信吉しんきちは、朝あさはや早く目めを覚さますと、昨夜さくやからの雨あめは、まだやまふずに降りつづけていました。

「そうだ、お嬢じようさんの学がっこう校がっこうへいかれる前まえに、オーバーシューズをおとどけしなければならぬ。」

彼かれは、起おきると、早はやくそうじをすまして、雨あめの中なかを出でかける仕し度たくをしました。昨夜さくやは、はじめの道みちを歩あるいて、家いえを探さがすのにずいぶん骨ほねがおれたけれど、今日きようは、その心しんぱい配はいがなかつたのです。

「ああ、ここだったな。」と、彼は、犬にほえられた家の前へくると思い出しました。

この雨では、ああいったけれど、小僧さんは学校へいく前にはとどけられないだろうと、食卓に向かつて、かね子が思っているところへ信吉は、ちようど玄関を開けて入ったのです。これに対して、かね子もお母さんも感心してしまいました。そして、二人は、いっしょに玄関へ飛び出してきてお礼をいったのでした。

信吉は、ただ約束を守つて、なすべきことをしたまでだと思つたが、こうして感謝されると、自分の体がいくら雨にぬれてもうれしかつたのであります。

その日、故郷の父親から久しぶりに便りがありました。今年としなつの夏は、ひじょうに暑あつかったかわりに、作物さくもつがよくできて、
 村は、景気けいきがよく、みんなが喜よろこんでいる。我が家わがやでも、日ひごろか
 らほしいと思おもつた牛うしを一頭とうか買かつたと書かいてありました。信吉しんきちは、
 心こころの中なかで、幾いくたびも万歳ばんざいを叫さけんだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「風雨《ふうう》の晩《ばん》の小僧《こぞう》《さん》となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年5月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風雨の晩の小僧さん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>